

令和7年度 第1回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日 時：令和7年6月2日（月）18：00～19：40

場 所：川崎市役所南庁舎5階 教育委員会室

出席者：卯月委員、岡田委員、高橋委員、中谷委員、米林委員、浦山委員、宮越委員、五十嵐委員、渡辺委員、百瀬委員、稲葉委員、石村委員

（事務局）落合教育長、田中教育次長、佐藤総務部長、岩上教育政策室長、吉永教育環境整備推進室長、宮川職員部長、北川学校教育部長、植村学校教育担当課長、五十嵐健康給食推進室長、大島生涯学習部長、大野総合教育センター所長、豎月教育政策室担当課長 他

欠席者：倉持委員

傍聴者：なし

司 会：豎月教育政策室担当課長

〔配布資料〕

資料1 川崎市教育改革推進会議運営要綱

資料2 川崎市教育改革推進会議委員名簿

資料3 次期かわさき教育プランに向けた考え方

資料4 かわさき教育プラン点検・評価シート

資料5 かわさき教育プラン点検・評価シート（別冊）

資料6 意見交換のテーマ

資料7 かわさき教育プラン点検・評価シート意見書

〔次第〕

- 1 開会
- 2 教育長あいさつ
- 3 次期かわさき教育プランに向けた考え方について
 - ・ グループ協議
 - ・ 全体協議
- 4 かわさき教育プラン令和6年度点検・評価について
 - ・ 全体協議

議題 次期かわさき教育プランに向けた考え方について

全体協議（1回目）

百瀬委員（Aグループ）：〔テーマ Key Project 1 探究〕

いろいろと話が出ましたが、生成AIの部分を中心に議論しました。

探究的な学びについては、どうしても学びの最終的な部分や教育の内容に目が行きがちです。ただ、基本的な探究スキルや学び方が十分でない中で進めると、探究公害になってしまうのでは

ないかと感じています。

生成AIの活用が進むと、小学校や中学校といった学年の枠を超えた学びをする子どもがたくさん出てくるのではないかと思います。

空間での学びや体験をどう組み合わせるかという話もありましたが、その垣根すら今後なくなっていくのではないかという意見もありました。

五十嵐委員（Bグループ）：[テーマ Key Project 2 切れ目のない支援]

切れ目のない支援について、本当に活発な議論がありました。

宮越委員から、田島支援学校での経験を基に、「学校があるうちはいいけれど、卒業後に社会でどう活躍の場をつくるか」という話がありました。社会の受け入れ体制やサポートについては、これからもっと考えていかなければならないという意見です。

不登校の話もありました。不登校が増えている中で、その子どもたちの居場所をどう考えるかということ。さらに、「学校に行かなきゃいけないのか」という考え方自体を見直す必要があるのではないかと、バイアスを外すという視点で、2年前から研修を受けているという話もありました。学校に行くことが絶対という考えをどう変えていくか、違う考え方も含めて検討が必要だという意見です。

岡田委員からは、切れ目のない支援を長いスパンで見たときに、小・中・高を通じた伴走型の支援が必要だという話がありました。その中で、キャリアパスポートを活用し、積み上げていく継続的な方法についても意見がありました。

最後に、私から現場の課題を共有しました。宮前小学校では、外国籍で日本語が話せない子どもが多く、担任一人で授業を成立させるのが非常に困難です。国際級はあるものの、日本語支援で手いっぱい状況です。また、不登校も増えており、原因がよく分からないケースも多い。岡田委員からは「原因は学校側にもある」という指摘もありましたが、子どもによって理由はさまざま、教員だけで対応するのは厳しい。専門の先生も欠員があり、人材不足が深刻です。こうした課題を含め、切れ目のない支援の実現にはまだ多くの課題があると感じています。

米林委員（Cグループ）：[テーマ Key Project 3 働き方]

「教職員が働きやすい環境づくり」のテーマで、現場の課題が挙がりました。

保護者対応やカスハラに時間的・精神的な負担が大きいということや、教職員の考え方が古いという意識を持たれることもあるという話もありました。

具体例には、体育祭の日程変更をめぐって、普段は協力的な地域の方からも意見が出るなど、保護者や地域からの要望や意見への対応に苦慮しているということです。

一方で、保護者が子どもと向き合う時間が少ないという家庭の課題も共有されました。日本では夕方に保護者と関わる時間が少ないという結果があるそうです。

もちろん一朝一夕で解決できる問題ではありませんが、保護者対応は学校にとって大きな負担なので、いかに保護者や地域を巻き込むかが重要だと思います。例えば、地域への説明を学校長ではなくPTA会長が担うなど、学校が全てを背負わない仕組みづくりが必要です。

ちなみに、昨日私は運動会のボランティアで保護者OBとして参加しました。保護者への注意は「おやじの会」の役目ということもあり、学校の先生が保護者に注意しづらい場面で、私に対応したこともあります。こうした関わりが先生方の安心につながると思います。

教職員が働きやすい環境をつくるためには、学校だけでなく周囲を巻き込む形をどうつくるか

が大切だと感じています。

全体協議（2回目）～閉会

石村委員（Cグループ）：[テーマ Key Project 1 探究]

先ほどは探究の話題の中で生成AIの話なども出ていたようですが、我々はまた違った角度でお話をしました。

まず、主体的に学ぶということについて、教職員の間でどれだけ共通理解できているかをしっかり確認すべきだという意見が出ました。主体的・探究的な学びについては、多くの教員は頑張っているものの、一部で準備不足や、児童生徒に委ね過ぎているのではないかという指摘もありました。

また、学年が上がるにつれて高校受験や大学受験があるため、こうした取組の重要性は理解されていても、保護者の理解を得にくい面があるという話もありました。そのため、保護者への丁寧な説明が必要だという意見です。

さらに、これは私からですが、「川崎市らしさ」ということで、川崎市には名立たる企業が多くあるので、そうした企業とつながっていきたいということや、私自身、組合の役員をしていて、学校教育をサポートしたいという声をいただくこともあるので、そうしたリソースをうまく活用できればと思っています。

岡田委員：[テーマ Key Project 3 働き方]

五十嵐委員から、現場での実際の状況や、受けている研修を踏まえて、いかに現場の考えを変えていくかという話がありました。同時に、現場が今どれだけ大変さも共有していただきました。

宮越委員からは、「文科省の言うことを必ずしも聞かなくてもいいのではないか」という意見がありました。川崎市のために頑張っている先生方が疲弊しないためには、もっと川崎市独自の考えで、例えばカリキュラムを減らすなどの工夫があってもいいのではないかという提案です。

中谷委員からは、先生によって授業に格差があるという話が出ました。そこから、世代間の違いにも話が広がり、バブル世代の校長、就職氷河期世代の40代、30代の先生、そしてZ世代の若手という構成の中で、どう働きやすい環境をつくるかという議論になりました。

その中で、教師のウェルビーイングをもっと考えていくべきだという意見が出ました。職場の心理的安全性、良好な労働環境、保護者や地域との信頼関係、そして子どもの成長の実感。特に教員の場合、子どもの成長を実感できることが、働きやすさややりがいにつながるのではないかとのことでした。

百瀬委員：[テーマ Key Project 2 切れ目のない支援]

稲葉委員からは、特別支援学校の現状について、川崎市ではこれまでも支援教育に力を入れており、福祉や医療とも連携しながら、他都市と比べても非常に充実しているという話がありました。

私からは、高等学校での状況について、以前はいなかったような発達障害と見られる生徒が入学してきていること、さらに定時制では中学時代に不登校だった生徒など、さまざまな課題を抱えた生徒が増えており、支援に苦慮しているという現状を共有しました。

浦山委員からは、「社会を明るくする運動」で、標語のステッカーを貼った郵便局のバイクや車

が地域を回るなど、地域に啓発を広げる取組が紹介されました。ただ、実際には教育と福祉がそれぞれ独立していて、トータルでの共通認識がまだ十分ではないという課題も指摘されました。

最後に、高橋委員からは、これまで「こういう子」「ああいう子」と分けて考えてきたが、今後はそうした子どもも含めて、それが普通であるという考え方に変えていく必要があるという意見がありました。これがまさにダイバーシティやインクルージョンの考え方につながるというお話でした。

議題 かわさき教育プラン令和6年度点検・評価について

五十嵐委員：

基本政策Ⅲ「一人ひとりの教育的ニーズに対応する」の主な取組成果②、スクールソーシャルワーカーの増員や学校巡回カウンセラーの定期派遣について、本当にありがたいと思っています。

特に学校巡回カウンセラーについてですが、本校だけでなく、2週間に1回、あるいは3週間に1回程度の訪問で、しかも午前中だけということもあります。お一人で5、6校を担当されているので仕方ないのですが、できれば小学校でも週1回は来ていただけるとありがたいです。

やはり、担任や学校の先生ではなく、第三者的な立場で子どもの話を聞いてくれる人がいることが大切です。その情報を踏まえて、次の指導に生かせるサイクルができるといいと思います。

今の頻度だと、対象児童も限られ、2週間に1回、3週間に1回が、結果的に1か月、2か月のスパンになってしまいます。予算的に大変なのは承知していますが、カウンセラーさんが週1回来ていただけると非常に助かります。以上です。

浦山委員：

新小倉小を竣工式のときに見ましたが、大変すばらしい学校だと思いました。

教室にいられない子どもが逃げられる場所があったりして、工夫が面白いなと感じました。廊下も端から端まで100メートルもあって、ドローンで上空から見たいくなります。

一方で、目の前にマンションが二つ建設中で、3年後に完成するということで、「新々小倉小を造るのかな」と一瞬不安に思いました。

いずれにしても、すばらしい学校だと思います。

宮越委員：

基本政策Ⅴ、18ページの「保護者や地域が学校運営に参加している割合」についてです。

小学校は40～49%ですが、中学校は18.9%で、目標の半分にとどまっています。他のデータは目標に近いものが多い中で、ここは際立って低いと感じました。

学校運営に地域や保護者が協力することへの期待に対して、十分に応えられていない現状があります。ここを強化しないと、働き方改革も進まないのではないかと思います。

そういう意味で注目しました。次期への宿題だと考えています。

高橋委員：

質問ですが、基本政策Ⅳの課題のところで「学校施設について引き続き計画的に予防保全を実施するとともに」とありますが、成果の欄に「校舎26校、体育館15校」と書いてあります。

川崎市にはたくさん校舎があると思うので、こうした取組が実際に計画に基づいて進んでいる

のかどうかを伺いたいです。

また、最近はいろいろなところで校舎の再生事業を行う際に、そもそも立地が崖崩れの危険がある場所や津波のリスクがある場所で、再生するのかどうかという点で議論になることがあります。このあたり、川崎市では計画どおりに進んでいるのか、そのあたりをお聞きしたいと思います。

教育環境整備推進室長：

「計画どおり進んでいるのか」というご質問についてですが、実際には、トイレの快適化事業を令和4年度までに優先的に進めていたため、その間、再生整備の工事は少し緩やかになっていました。

そのため、現時点では計画どおりとはいっていません。ただ、今後は新小倉小のように、なるべく同じような環境で子どもたちに学んでもらえるよう、引き続き工事を進め、教育環境に配慮した学校づくりを進めていきます。

また、防災の関係ですが、校舎を高台に移すといった大規模な対応は難しいものの、例えば災害時に使用する発電機などが浸水リスクのある場所に設置されているケースがあります。そうした設備については、再生整備事業を活用してかさ上げするなど、災害時に機能できるような対策を検討中です。今後、風水害などにも対応できるよう準備を進めていきます。

高橋委員：

他の自治体でも同様の取組をいろいろ聞きますが、川崎市は非常に進んでいて、積極的にやられているという印象を受けました。ありがとうございました。

米林委員：

基本政策Ⅴ「学校の教育力の強化」についてです。ここに書かれていることは、もちろん進めてほしいと思います。少し気になったのは、学校の教育力が「教職員の話」に限定されている印象があることです。

もちろん、教職員の多様性や、これからの時代に合った研修なども重要ですが、学校の教育力を考えるなら、地域とともにある学校という視点や、保護者を含めた形で考える必要があると思います。

ここに書かれていることは大切ですが、もっと視座を上げて、視野を広く進めても良いのではないかと感じました。

宮越委員：

基本政策Ⅵの「コミュニティ・スクール、学校運営協議会」についてです。この年度、川崎市内すべてに設置されるとあります。実感としては、これまでの学校運営協議会とあまり変わらない印象ですが、私は、それでいいのではないかと考えています。

地域に不要な権限を与える必要はないと考えています。これまでも学校教育推進会議で地域や子どもの意見を聞き、学校方針に反映してきました。学校からお願いがあれば、地域教育会議やPTAが協力する仕組みもできています。

文科省の方針に倣う必要があることは理解していますし、反対はしませんが、川崎市は以前から地域教育会議や寺子屋事業など、地域の教育力を生かして子どもの成長を支える仕組みを進めてきました。こうした川崎市の実績をもっと前面に出して良いのではないかと思います。

コミュニティ・スクールとの整合性を気にしすぎている印象があります。

岡田委員：

今、宮越委員がおっしゃったように、川崎市の教育のすばらしさを全教職員がもっと実感できるように、うまく伝えていただきたいと思います。ここに示されている目標や参考指標は、すばらしい数値が並んでいて、継続しているわけですから、それをさらに続けながら、川崎市の教育のすばらしさをみんなで共有し、もっとよくしていこうという流れにしていきたいと思います。

また、先ほどから話題になっているように、AGIからASIに変わっていく時代が、予想よりも早くやってくる可能性があります。教育の在り方そのものが大きく変わるかもしれません。だからこそ、こういう変化のときには、川崎市の教育は何を考えるかということ、やはり目の前の川崎市の課題を1つ1つ丁寧に解決していくことが大切だと思います。変化にとらわれ過ぎると、足元の教育が崩れてしまうのが一番いけない。

こういうときこそ、川崎市の課題に合理的に対応することが重要です。川崎市にはすばらしいスタッフがいます。教育委員会の皆さんは、私が全国で講演してきた経験から見ても、本当に優秀です。川崎市の指導主事は、地元をしっかりと考えているという点で特にすばらしいと思います。その強みを生かして、変革につなげていただきたいと思います。ありがとうございます。

(19時40分 閉会)